

小説 異形の子

甲山 羊二

初対面らしからぬ対面が突如として始まった。私は自分の目を疑い、加えて自分自身の感覚を疑った。そこではまず一定の距離が必要だった。そしてそれによって生じた間隔には、普段にはない非日常的な独特の間合いが息苦しいまでに漂っていた。

正面にいるのは、もはや幼児などではなく、愛くるしい女兒などでもなく、ひと目で嫌悪の対象と分かる、醜い物体でしかなかった。

醜い面長は立ったままじっとこちらを見上げていた。その両目は余りに細く吊り上がり、適当に配置された丸い鼻と小さく開いたままの荒れた唇からは、嫌らしいほどの臭気さえ感じられた。

私はあえて視線を逸らせることなく、彼女の様子を隅々まで眺めた。それは全く微動だにせず、奇怪さだけを放出していた。

清潔感を欠いたままのシャツ。赤い斑点が浮かぶ首筋。黒ずんだ細い腕。すっかり凝固した無数の傷

跡。病的な程に痩せた身体。縮こまった低い背丈。前屈みの姿勢。裸足。薄汚れた足元。

それらは確かに放置の証に他ならなかった。しかし悲哀と憐憫などとは明らかに異なる、別の次元の感情を私に彷彿させた。

奇妙な対面を遮ったのは妻だった。その場から動こうとしない彼女を、妻は無理矢理連れ去ろうとした。低音の雄叫びが玄関に響き渡った。

妻は彼女の伸びるに任せた髪の毛を両手で鷲掴みにした。そうして彼女を引きずるようにして、私の横をすり抜けて行った。

以後、彼女は招かざる異物として、平穏な私達の生活の奥深くにまで、形跡と痕跡を残すことになった。

彼女は紛れもない侵入者であり、明らかな侵犯者だった。愛らしさの完全なる欠如、更には無効率かつ無機能な様態そのものは、私達に敵意にも似た激しい感情を抱かせ、しかもそれを瞬く間に増幅させた。

彼女の養育は私達の望むところではなかった。しかし、義母は妻にその義務を与えた。妻は抗うことなく、即座に屈服した。それが両者の歴然とした、そして厳然としたありのままの關係だった。

妻は、夫と娘を捨てて出奔した不貞な悪女をどこまでも詰り続け、その後すぐに首を吊って自らの命を絶った弟をいつまでも慈しんだ。結局幼い子供だけがそこに残された。

しかし哀れみが彼女を照らすことはなかった。その独特の容貌は義母にとって受忍の限界を遙かに超えていた。それはまさに忌むべき初孫以外の何者でもなかった。そうして白羽の矢は必然として立てられたのだった。

無期限の養育は、異物の押し付け以外の何物でもなかった。私は従順な妻に同情した。妻と義母との間にある歪みは、妻にとつて苦悩の元凶でしかなかった。それは逃れようのない呪縛でもあった。

兎にも角にも、彼女の養育は果てしのない模索のように思えた。同時に、彼女の姿を好奇の目に晒すという、私達にとつて最大の恥辱についても、細心の注意を払うべく、何重もの策を講じた。

第一に、彼女には専用の部屋をあてがった。そして無断での出入りを固く禁じた。

第二に、彼女を連れての日中の外出は一切避けた。夜間については、直接車庫からの出庫のみに限った。

第三に、彼女のいる部屋の窓は雨戸で閉じ、彼女の洗濯物も屋内にて乾燥させた。

些細な事柄を含め、私達は多くの取り決めに遵守しなければならなかった。こうして彼女は非ざる同居者として、完全秘匿のうちに存在することとなった。

養育は予想以上に困難を極めた。それは彼女の性
質に由来するものばかりだった。

人間は生まれ持った能力に加えて、環境がその性質を決定付けていく。当然、彼女も例外ではなかった。

私達はてこずった。中途半端な優しさなど、彼女には全く通用しなかった。

団らんの基である食事、生活の基礎をなすそれについては、特に私達をうんざりさせた。時には、臭気による胸の悪さと、物質的な変貌の無残さで、本来性は瞬く間に喪失した。

食事時の彼女の咀嚼はしつこさを極めた。そして

残りを口元から平気で垂れ流した。その度に妻は彼女を厳しく責め立て、食卓から彼女の分を引き去った。彼女にとって、食事は空腹を満たすための、その場しのぎの作業に過ぎなかった。

それは食事だけではなかった。彼女の現状はほとんどにおいて、備わるべき器量とは大きくかけ離れていた。妻は彼女のそうした悪癖を修正するべく対処を講じた。しかし彼女へのあらゆる方法は虚しいだけで、そこにあるはずの含蓄もまた、ただ宙を彷徨うのだった。

妻は言葉による彼女との交信を諦めざるを得なかった。彼女は言葉を解する能力の大半を喪失していた。彼女の知る言葉は自らの都合に合わせた、必要最低限のものに限定されてしまっていた。もはや妻は彼女を打つしかなかった。

どれだけ妻に打たれても、彼女が泣くことは決してなかった。無表情のまま、むしろ平然として、虚ろな目をひたすら妻に向け続けた。妻はその度に逆鱗を重ねていった。

私は距離を保ちながら彼女と接した。それは物理的な間隔に留まらず、心理的なそれをも含んでいた。

そこにある緻密さは私によるものであると同時に、彼女によるものでもあった。それがどこかで反故にされない限り、私の存在は彼女にとって許容範囲の一部になり得ていた。

彼女は時々笑った。声を立てずに笑った。笑みだけのその動作は気味の悪さを、より一層増殖させた。しかし一方では、そこから生まれる、得も言われぬ欲求に、私はしばしば戸惑いを覚えた。

不敵な笑いを徹底的に抑圧し、それを困惑へと、更には恐怖へと誘う。慄きと悲嘆。それらと混在する醜い物体。それは徐々に深みを帯びていく。

映像はまだ止まない。そこから辛辣さは極まっていく。打つ。蹴る。懇願。再び打つ。再び蹴る。諦念。強く打ち、強く蹴る。映像はようやくそこで消えていく。

現実として、私が彼女を打つことはなかった。そうして、私は自分の内面を制御しつつ、常に野心の渦中に自信を置いた。

妻は彼女を打ち続けた。一方、私は傍観者に徹した。それについて、妻からの不平や不満は一切なかった。養育はまさに調教ともいえた。肉体の奥深く

に、渾身の力を刻み込む。同一の事柄をひたすら繰り返す。もちろん、言葉ではなく、打つことで全てを論していく。

それはある種の折檻であり、ある意味の暴力でもあった。しかし、あらゆる美しさや麗しさは、彼女に対峙する場合においては、排除されなければならなかった。それが実際であり、事実であり、真実でもあった。上辺の修飾語など、一切不要だった。

妻はそうした過酷な役を一身に引き受け、まさに演技の域を遙かに昇華させていった。それはまるで埋もれていたはずの塊が何かに触発され、噴き出る火炎の如く、一気に地上に表出したかのような、思わず息を呑む程の、凄まじい迫力まで兼ね備えていた。

彼女を激しく打ち、足蹴りにし、髪の毛を掴んで引きずり回し、更にまた打つ。鬼の形相で数々の言葉を浴びせる。そうした一日が終わりを告げる頃、ようやく私達は元の日常を取り戻し、平穏な時間の中に回帰した。

私は妻に、妻は私に、にわかに向き合いながら、それぞれに心ゆくまで求め合った。私は妻の身体の隅々まで丁寧に愛撫した。妻もまた私の動きに対し

て、甘い声を上げながら敏感に反応を続けた。時間は幾ら有っても足りなかった。私達は上になり下になり、お互いの身体を片時も離すことなく、ただ本能のままに貪り合い、快樂の果てを何度も味わった。私にしか見せない妻の表情、私にしか聞かせない妻の声に、悦の荒波は容赦なく押し寄せ、私をすっかりのみ込んでいった。私もまた、柔軟でしなやかな妻の肢体に向け、新たな息吹をふんだんに注ぎ込んでいった。

彼女は妻を酷く恐れた。それはある意味での学習効果でもあった。打たれる寸前、微妙に身体を震わせ、両手で顔を覆った。痛みの度合いは、低音による唸り声の強弱がそれをほぼ正確に示した。

人間の知能は必ずしも年齢とは合致しない。その数値は普遍的なものではない。彼女の場合も、著しい遅延はあるものの、少しずつ言葉を取り込み、自らの意思や感情をそれによって伝達する、そうした術を認識し始めていた。物事の良し悪しについても、好き嫌いについても、正確さの欠如と、多少の振れはあるものの、以前と比して改善も見られた。

彼女が生きてきた三年という月日は、やはりその

姿かたちを集約されていた。酷い面長、細く吊り上がった目、適当に配置された鼻、開いたままの口、本来は真つ当な人間として扱われるべき存在が、生きながらの遺棄、忌避の対象として、完全に置き去りにされた。そうして、彼女は単なる物体として、義母から私達夫婦へと、見事に継承されたのだった。

彼女は不幸だった。しかし不幸であることを彼女が知ることはできなかった。彼女にとつての当面の不幸とは、妻に打たれることでしかなかった。結局、彼女はその位置に留まるしかなかった。

彼女の救われる道はひとつしかなかった。それは生きるのではなく、程良く滅びることだった。しかもできるだけ早期に、その意思などに一切関わりなく、消去されてしまうことだった。

そもそも、彼女はこの世にその存在が認められてはいなかった。私的のみならず、彼女の存在を公的に証明できるものが皆無であることを、私と妻は既に聞いて知っていた。墮胎を免れた彼女は、助産師による間引きという絶望からも、かろうじて逃れたのだった。そうして、彼女は生きる運命を与えられたのだった。ただし、そこには異形という条件が付帯された。

彼女にとつての滅びは、一般的な意味とは区別されなければならなかった。滅びは完全なる死ではなかった。滅びは次なる再生への区切りであり、その為の契機に他ならなかった。程良い滅びは、付帯条件を白紙にさせ、呪われた運命を帳消しにさせ、彼女そのものについては、周囲に忘却を与えるだけの十分な効果を秘めていた。

私は彼女に近づくことに決めた。野心は精査され、ある種の計画となって、目の前に繰り広げられた。私はそれを妻に告げなければならなかった。そして、その時は、ある兆候とともに静かに訪れたのだった。

私は彼女に一体の人形を買い与えた。それは私の手に収まる程の大きさのものだった。西欧風の女兒を模したその人形に、彼女は予想以上の興味を示した。毛糸で編まれた頭髮を丁寧ていねいに指でとき、そうして両手で自分の胸元へと引き寄せた。これまでの数ヶ月では見せたことのない、まるで失われていたものをすっかり取り戻したような、異形である現実を払拭できるだけの、十分な要素に満ち溢れた光景だった。

彼女は柔和になった。そこには生気が溢れていた。

種拙ながら、言葉と表現があつた。優雅さに似た落ち着きがあつた。人形に対する笑みには、母性さえ感じられた。彼女は人形を片時も離そうとはしなかつた。

私と妻は変貌した彼女を黙つて眺めた。それは私達に安堵を覚えさせた。同時に妙な苛立ちが沸々と込み上げてくるのを感じた。彼女は異形でなければならなかつた。そしてそのことを自覚していなければならなかつた。けれどもそうした能力については不備の状態だつた。私達にとつて、彼女に対する憤怒こそ、必須の養育要件だつた。妻は新たな生命を体内に宿しながらも、依然彼女を打ち続けた。

彼女は人形を抱いたまま眠つた。私はその人形を取り上げ、彼女を現実に取り戻さなければならなかつた。そして私達もまた彼女の現実と再び向き合ひ、彼女の存在を封印しなければならなかつた。私はその使命を自らに課した。与えたものを今度は取り上げる。密かにそれを実行し、滅びへの道を彼女に歩ませる。

私は時を待つた。時は、新たな時を紡いでいく。焦りは禁物だつた。幸いにも、彼女の眠りの穏やかさは、私を急かすどころか、踏み入れようとする未

知の領域を、むしろ鮮明に照らした。

それから間もなくして、私は彼女から人形を奪い取ることに成功した。目覚めた彼女は、困惑を身体全体で露わにしながら、消え去つた人形を、必死になつて探し出そうと試みた。

彼女は私に平伏し、妻にすがつた。妻は彼女の身体を退け、押し倒した。彼女は泣いた。遂に号泣した。もはや彼女は哀れな異形に過ぎなかつた。歪んだ表情。見開いた両目。止まらない涙。唇に伝う鼻水。荒い呼吸としゃっくり。唸るような雄叫び。私達はそれらを、愉快さをもつて眺めた。

ひとしきり泣いた後、彼女は泥のように眠つた。昏々と眠り続ける顔の表面は、無残な跡形にすっかり覆われていた。けれども、そこに同情など微塵もなかつた。

彼女は死ななければならなかつた。これ以上生きることで、生を全うすること、一体どれだけの幸福を彼女が享受できるというのだろう。その保証を誰がもたせてくれるというのだろう。彼女の前に並べ立てられる一応の美辞麗句が、彼女に何をもちかせてくれるというのだろう。距離を置かれ、指を差され、小声で囁かれ、締め出され、排除され、嘲

笑され、彼女は外側で生きていく他ないのだ。

人間はそもそも無償の産物として、平然と生きて
いる。私も妻もその例外では決してなかった。ここ
で彼女を殺してみたい。突然襲ったそうした衝動に
戸惑いながら、私はその場を離れた。

彼女からすっかり生気が消えた。私はそれを見計
らって、人形の在り処を彼女に伝えた。人形は誰か
に連れ去られ、沼底に沈められてしまった。早く助
けないといけない。人形は助けを待っている。

彼女は私の話に黙って耳を傾けた。私は説き明か
しをするように、何度も同じ内容を彼女に伝えた。
彼女は目を見開き、私をじっと見つめた。私は彼女
の肩に触れ、人形に対する積極的な救助を勧めた。
彼女を乗せた車は、予め目星をつけていたある沼
へと向かった。陽を遮る程の茂みの中にあるそこは、
いわれのある、まさに底なし沼だった。付近に車を
停めた私達は、彼女を誘導するようにして、ゆっく
りと沼に近付いた。もはや彼女には疑うことなど微
塵もなかった。彼女は頬を紅潮させながら、ひたす
ら従順なまま、私達の指示に従った。

沼には柵がなかった。私は広い沼の中央を指差し、

彼女の足元をそこに向けて促した。しかし、彼女は
微動だにしなかった。彼女は恐れていた。表情を強
張らせたまま、その場にただ立ちすくんでしまつて
いた。

そこには光などなかった。水鏡もなく、波もなく、
間口を大きく開いたまま、沼は彼女と対峙を続けた。
時間は薄暗い静寂とともに、刻々と過ぎていった。
長い時間だった。

私は再び彼女を促した。妻は彼女の背中を軽く押
した。それらに触発されるように、彼女は沼に向か
って一歩一歩進んだ。

彼女の膝が沼に沈んだ。彼女の動きが止まった。
彼女は振り向き、私たちを見つめた。異形だった。
紛れもなく、彼女は異形だった。

私はもう一度沼を指差した。妻は片手で追っ払う
仕草を繰り返した。

彼女は沼に向き直り、歩みを進めた。既に、彼女
の身体は沼の中にあつた。頭だけを水面に出し、立
ち止まっては、また進んでいった。

突然、彼女の身体が消えた。水面には荒い波が立
ち、彼女の頭がそこに浮かんだ。彼女は両手をばた
つかせながら、泥だらけの顔をこちらに向けた。目

は吊り上がったまま剥き出され、口は縦長に裂かれたように開かれていた。顔は、頭は、沈んでは浮かび、浮かんでは沈んだ。格闘はしばらく続いた。水面には細かい泡が入り乱れ、それらを不吉な波が次々と打ち消していった。鳥の声が遠くから聞こえた。

遂に彼女は沼に沈んだ。周囲にも静けさが戻った。私達は黙ってお互いを見つめた。妻はトートバッグから人形を取り出した。私は妻の身体をそつと引き寄せた。